

ポーランドで生まれたアートマイムの祭典

# “サイレンス・オブ・ザ・ボディー” Milczenie Ciała” 日本公演

児真 順子

ポーランドのマイムアーティスト、ステファン・ニジャウコフスキがカンパニーメンバーと共に初来日し、アートマイムの祭典“サイレンス・オブ・ザ・ボディー/Milczenie Ciała”が11月7日～10日、東京・両国のシアターX(カイ)にて開催されます。

ニジャウコフスキは2004年にポーランド共和国大統領よりポーランド金の十字架勲章“Złoty Krzyż Zasługi”を、今年5月には文化・国家遺産省大臣より「文化功労章グロリア・アルティス(芸術栄誉)」銀メダルを授与されました。



写真1 “震える身体/ Drzące Ciało”

ポーランドの演劇といえばイェジー・グロトフスキやタデウシュ・カントルなどが思い浮かびますが、同時代にポーランド演劇界、マイム界を語る上で欠かせないヘンリク・トマシェフスキ(1919-2001)がいます。彼のマイムは、ダンスや演劇という分野だけでは尽くせない表現を追求した結果生まれ、他国との芸術的交流も容易でなかった時代背景から、一般的に知られているフランスやイタリアのマイムの影響はほとんど受けませんでした。

今回来日するステファン・ニジャウコフスキは、トマシェフスキ主宰「ブロッツワフ・パントマイム・シアター」のトップスターの一人でした。退団後はワルシャワを経てニューヨークへ渡り、フランスのマイムが主流だった当時、ポーランド人のマイムアーティストとしてマイム学院や劇団を設立し、世界中を公演し、心や精神、感情や感覚を身体に映し出す普遍的な芸術としてのマイムを創り上げました。

このマイムは、一般に知られているジェスチャー的なテクニックを見せるものとは全く異なり、人間性やそ

こま じゅんこ (写真1:右;写真2:左端)

3歳よりクラシックバレエを始める。マイムをステファン・ニジャウコフスキの右腕でもあったテリー・プレスに、その後ニジャウコフスキに師事、現在は同氏主宰マイムアートシアター(ワルシャワ)に所属。

の存在、人間を通して感じられる世界を表現し、身体を媒体として、個を超えた普遍的な表現を最も重視するもので、身体表現の土台であると同時に、人間を扱うあらゆる分野に通じる根源にも繋がっています。ポーランド語の“Milczenie”は、沈黙、または深い知恵を悟ることで分かる精神的な静けさを表しますが、ニジャウコフスキは、マイムとはこの領域でのコミュニケーションであり、人間の賜物として最も大切なものと考え、著書『マイムの世界/Swiat Mimów』で「マイムはただ言葉を発しないのではなく、言葉を超越して存在しなければならない。そして言葉になる前に浮ぶ静けさは何にも勝り、それは永遠に続く」と書いています。



写真2 “スピリット・オブ・サウンド/ Duch Dźwięku”

今回の催しは、全世界のいかなるものとも比較できない独特な芸術的試みで、公演、講習会、アートカンファレンスなどを通じて、「沈黙の演者の芸術」の考察と習得にフォーカスが当てられています。ポーランドで生まれたこの崇高なマイムをぜひ鑑賞し、沈黙のコミュニケーションを経験して何かを感じ取っていただけたらと思います。詳しくは、以下をご覧ください。

<https://www.facebook.com/j.artmime/>

いを受けていた。しかし社会主義崩壊後には、ポーランド政府は多言語・多文化政策をとる EU と歩調を合わせ、2005 年、カシュブ語はポーランド政府が行政や教育といった公的領域での使用を認める「地方言語」という地位を得た。つまり今日では政治的にも「方言」ではなく、「言語」ということができるのである。しかし、これはカシュブ語が、大言語がもつ安定した文章語形態を有すことを意味するわけではない。カシュブ語は専ら日常会話で使用され、地域差も非常に大きい。さらに今や全カシュブ人の母語でもあるポーランド語の影響も大きく、カシュブ語は今も文章語形成の過程にある。

カシュブ語の発達において最も重要なのは文学活動である。その端緒はフロリアン・ツェイノヴァ(1817-1881)に見られる。彼は独自の正書法を作り、文学活動を行った。当時、十分な理解を得られなかったため、その活動が結実したとは言い難いが、後世に大きな影響を残した。カシュブ語で文学作品を執筆する伝統は限定的であったが、ヒェロニム・デルドフスキ(1852-1902)に引き継がれ、さらにカシュブ語の独自性を主張しながらもポーランドとの一体性を重んじる集団「若きカシュブ人」を率いるアレクサンデル・マイコフスキ(1876-1938)によって発展された。特にマイコフスキによる英雄譚「レムスの生涯と冒険」(1938)は、カシュブ語の高度な文

学的可能性を示す最高傑作であり、現在も広く親しまれている。その後、マイコフスキの影響を受けつつ、カシュブの言語と民族の独自性をより強く打ち出した「カシュブ連合」が結成され、地元の教師アレクサンデル・ラブダ(1902-1981)を中心に、文学活動や標準語形成の試みなど多様な活動が行われた。社会主義時代に入ると、ポーランド政府の立場と異なる「連合」の活動は禁止され、その結果、カシュブ語文化は低迷した。それでも「フォークロア」や「方言文学」など様々な表現形式をとり、その言語文化は継承され、中でも詩はカシュブ文学の主要で伝統的なジャンルとして確立し、社会主義時代にも多くの作品が残された。

今回来札するヤロミラ・ラブダ(Jaromira Labudda)氏は、「連合」の指導者であった父アレクサンデルの血と精神を引き継ぐ詩人で、1977 年の文壇デビュー以来、精力的に執筆活動を続けている。また、カシュブ語が公式に認められていない 1990 年代からカシュブ語教育を始めた、いわばカシュブ語復権の先駆者でもある。

日本ではまだ馴染の少ない分野であるが、激動の時代を経験したその知られざる文化の魅力を、ここ札幌で共有できることをうれしく思う。

(のまち・もとき、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授)

〈協カイベント報告〉

## ポーランドの巨匠ニジャウコフスキの アートマイム日本初公演を観て

霜田 英磨

去る 11 月 7 日(金)の晩、東京・両国にあるシアター X(カイ)で初日を迎えた、ポーランドの巨匠ステファン・ニジャウコフスキによる「アートマイム」公演を、劇場のご招待により鑑賞させていただきました。

当日はあいにくの小雨模様でしたが、劇場の入口で、今回出演されるマイム・アーティストの児真順子さんのご両親、児玉さんご夫妻のお出迎えを受けました。この日本初公演は、児玉さんの熱心な働きかけにより、シアター X の主宰者の上田美佐子さんが自ら数回ポーランドへ足を運んで実現されたという経緯は、ニジャウコフスキ氏によるプレゼンテーションの謝辞の中で紹介されました。また、開演に先立ち、2年前にシアター X の中に設立された「日本アートマイム協会」の主宰者 JIDAI 氏からも、児玉さん、上田さんへの謝辞がありました。

プログラムは大きく以下の5部に分かれ、全4時間の長丁場でした。

1. ニジャウコフスキ氏と受講者男女 16 人による公開ワークショップ  
(舞台上でリアルに実演)
2. 「震える身体」上演(児真さん出演の短編)



3. ニジャウコフスキ氏によるプレゼンテーション(児真さん制作の映像を交え、通訳を介した説明)
4. テリー・プレス氏によるプレゼンテーション(アートマイムの4つのポイントについて説明)
5. 「スピリット・オブ・サウンド」上演(児真さんと海外アーティスト4人による7体の人物大人形を用いた演技)

アートマイムには台詞がありません。最後の公演は1時間を超える大作で、ポイントを考えながらの鑑賞は、能舞台のような幽玄の世界と、無声映画より難解な印象が複雑に絡み合うものでした。終演後、皆さんと写真を撮っていただきました。児玉さんに改めて御礼申し上げます。



(しもだ・ひでまろ、本会東京事務所／写真提供、シアターX)

## ステファンカンパニー東京公演を終えて

児玉 忠征

多くの皆様のお力で、ステファンカンパニー公演は連日満員の大盛況でした。感謝、感謝です。

娘(順子)はピアノとクラシックバレエからマイムに変わり、当時カナダ人のプレス先生(今回客演)の下で研鑽を積んでいたとき、たまたまホームページで、アメリカにおけるマイム講習会にポーランドからステファン・ニジャウコフスキ氏が来ることを知り、単身で参加しました。その後、娘はワルシャワへ渡りました。私はただ見守るしかありませんでした。

転機は、2005年9月ポーランド映画週間『今日・明日』を観に行き、NHKドラマプロデューサーで、大河ドラマの生みの親の合川明様に出会ったことです。ワルシャワ在住の松本照男さんをご紹介いただき、お二人の間をとりもちつつ、両国を繋ぐことに携わろうと決めました。

すると、娘がワルシャワで出会った岩手県在住のポーランド児童文学翻訳者・田村和子さんのお力で、ワルシャワのパヴィアク監獄で37歳で銃殺されたカミラ・ジュコフスカさんが秘かに作った美しい日本人形の悲話を描いた、マイムとピアノ舞台作品『木は全て見ていた～パヴィアクの日本人形～』の公演が実現しました(2007年12月9日、金ヶ崎町中央生涯教育センター)。合川様に相談してNHKの取材をお願いし放送していただき、田村さんには日本人形の話の本にして、岩波ジュニア新書から出版していただきました。その恩人合川様は残念にも今年4月87才でお亡くなりになりました。

さて、2005年11月に娘の結婚式で初めてワルシャワを訪問、その後ニジャウコフスキ氏を紹介されました。厳しそうな芸術家でした。何時か日本へ呼ばたいと考え、誰に頼まれたわけでもありませんが、日本招致について勝手に調べ行動を起こしました。

しかし経験の無い私では糸口すら見つからず3年が過ぎ、あきらめかけた時に、朝日新聞で両国シアター・カイ上田美佐子芸術監督の記事を見て訪問し、ニジャウコフスキ先生のことをお話したら、直ぐにワルシャワへ飛んでくださいました。さらに前駐日大使ヤドウィガ文化遺産省顧問にニジャウコフスキ先生と会っていただき、本物の芸術家との評をいただきました。こうして皆様のお力添えで日本公演が実現しました。

ステファン先生には、来日土産の中に『文楽・近松門左衛門作・曾根崎心中』DVDを加えて日本の伝統文化をご紹介します。公演の後は、浅草・浜離宮・貿易センタービル展望台・日本料理店などを案内して、皆さんと楽しい時間を過ごしました。

最後にこの紙面をお借りして、上田美佐子様、ヤドウィガ様と、亡き合川明様に心から感謝を申し上げます。(こだま・ただゆき、本会会員)



マイム終演後に(左2番目から)筆者、霜田氏、順子、上田氏、妻弘子、左右は赤平高校同窓西多夫妻